研究発表

戦前台湾に於ける日本文学

——西川満を例として——

Japanese Literature in Prewar Taiwan

——A Case of Mitsuru Nishikawa——

張　　良　澤*

Abstract

The scholars of the history of Japanese literature have long ignored the literature Japanese people produced upon the foreign climate. Taiwan owes much of its literary heritage to the Japanese men of letters who did wonderful jobs while it was under Japanese rule. Mitsuru Nishikawa was one of them. He lived in Taiwan for a long time, loving it as his spiritual home. He published various periodicals, and wrote poems, fairy tales, novels and reviews, contributing very much to the birth and growth of Taiwan literary circles.

Although he was in conformity with the national policy of Japan during World War II, I think his contribution to Taiwan literature should be justly evaluated. I would like to point out the following as his greatest achievements:

1) He made Taiwanese realize the existence of Taiwan literature.

* Zhang, Liang-Ze　〔現職〕　筑波大学外国人教師

2) He succeeded in sublimating Taiwan folklore to pure literature.

3) He trained Taiwan men of letters.

4) He opened up a new field of literature called "Japanese overseas literature".

I think that it is the duty of the scholars who study Japan to discover and evaluate the literary achievements of Japanese who worked overseas and that it is necessary to make Japanese literature more international.

1．はじめに

私の専攻は中国文学で、日本文学に対して門外漢ですので、皆様の前で日本文学に関してお話し申しあげることは大変恐れ多いことでございます。あえて白紙状態の人間の方がかえって先入観を持たないで宜しいかも知れませんので、日ごろ考えております一つの問題を提起して、皆様にお教え頂きたいと存じます。

私はたまたま中国文学の一支流としての台湾文学に興味を覚え、台湾文学の史的考察を試みてまいりましたが、一つの大きな難問に悩まされて、どう仕様もないことがございます。

つまり戦前、半世紀に渡って、台湾が日本の「領地」になった時、台湾人は完全に日本教育を受けました。そこで一部の台湾人作家は、純粋な日本語でしかも完璧な日本人的発想で作品を書いたのですが、その作品が日本人に読まれても日本文学であるとまちがえて信じても怪しくない場合、この作品はどう位置づけるべきでありましょう。これと対照的に、一部の日本人作家が長期あるいは短期の台湾在住によって、台湾の郷土に深い関心を持ち、深

い愛情を注いで表わした作品が、たとえ日本語で書かれても、その内容・発想及び全体の雰囲気までが台湾的なものであるならば、これをどう位置づけたらよいでありましょうか。

内容・形式はどうでもいい、と割り切って民族に重きを置く立場から区分することにして、とにかく台湾人が書いた作品は台湾文学へ、日本人が書いた作品は日本文学へ入れてしまえばいい、と言う一般の文学史家の考え方をとったとしてもそれは至極当然のことでありましょう。

ところで、台湾文学史に関する著作はいまだ世の中に一冊もありませんので、とりあえず戦前ないし戦後に出版された各種の日本文学史の著作を手本として、この考え方をあてはめてみようと試みて、いっそう戸惑いを感じました。と言うのは、当時日本の「臣民」である台湾人作家はもちろん、植民地で活躍してきた日本人作家のことさえも、日本文学史の中に殆んど記載されておりません。せいぜい戦時中、中国戦場に派遣された従軍作家の少数の作品を「戦記文学」として取り上げているくらいで、長期に渡って台湾文学を促進し、日本文学の中に一分野を開拓した台湾在住の日本人作家が無視されていることは、誠に遺憾でなりません。

このような現状を考えるにつけ、植民地台湾に限らず、ここに言うような二つの時代にまたがって、二つの民族文化圏の境目にあった日本の「外地文学」の作家たちは、なぜ日本の文学史家から見捨てられているのでしょうか。彼らこそ日本文学の延長線で働いた尖兵ではないでしょうか。私はこのような問いを発せずにはいられません。

2．台湾の日本外地文学者たち

もちろん日本の台湾占領直後の騒乱期にすぐれた文学作品が生れようはずはありませんが、文学の各ジャンルに渡って早くから種子が蒔かれておりました。

例えば漢詩文の方では、懐柔政策の手段として、総督児玉源太郎以下、結

城蓄堂・籾山逸也・住江敬義・加藤重任・小泉盗泉・久保天随らの文士が集って漢詩文を提唱したり、当地の漢詩人との交流を計ったりしました。日本近代文学の第一人者である森鷗外もその一役をかったのです。

同時に、日本独特の俳歌も服部烏亭の俳誌「相思樹」を始め、岩谷莫哀・池ケ谷栄吉・西口紫溟・諏訪忠藏・吉川利一・山本岬人・三上惜字塔など、数え切れないほどの俳人歌人が生まれ、その影響は今日の台湾俳歌壇にも及んでおります。

明治末期に渡台した新詩人伊良子清白は、台湾風情詩を表わし、大正から昭和にかけて、後藤大治・吉田静洋・西川満・中山侑らが新詩気運を起こし、矢野峰人・北原政吉・黒木謳子・石田道雄・長崎浩らが大活躍いたしました。

明治28年台湾に渡航した伊能嘉矩と、明治30年『台湾日報』主筆として渡台した内藤湖南を始め、中村忠誠・尾崎秀真・川合真永・山中樵・片岡巌・小泉鉄・増田福太郎・金関丈夫・国分直一・池田敏雄・田中薫らの一流の歴史学・民俗学者が続々と成果を挙げたばかりでなく、随筆家としても本土作家に比して決してひけをとらない業績を残したと言ってよろしいでしょう。

明治29年台湾に上陸した軍人の石光真清は、台湾に題材をとった小説を表わしましたが、大正9年台湾に旅行した佐藤春夫の傑作『女誡扇綺譚』を発表してから、台湾小説が本格的に登場しました。多田道子・尾崎孝子・大鹿卓・庄司総一・中村地平・坂口襌子・新垣宏一らも大きな文学的遺産を残してくれました。

文学評論及び文学史の研究について、別所孝二・平山勲・島田謹二・中村哲・神田喜一郎らの業績も特筆すべきであります。

以上、各分野で活躍した日本人作家の名前を挙げるならば、少くとも300人は下りません。

3．作家西川満の生涯

先に申し上げましたような大勢の在台日本人作家の中から、もっとも典型

的な存在である西川満を選んで考えてまいりたいと思います。その典型的な存在とは、四つの理由があります。

1．台湾を完全に自分の故郷として生きてきたこと。——

氏は明治40年、日本の会津若松市で、父西川純と母西川しげの長男として生まれました。明治44年、3歳のとき、両親とともに渡台し、昭和20年8月の日本敗戦まで、34年間の長い人生を台湾で過しました。台湾は氏にとって一生涯忘れられない故郷でありましょう。その間、氏は早稲田大学仏文科に三年間在籍しておりましたが、在学中の習作詩集『竹筏』の発行所に「台北市大正町1の14」と書いていることは無理とは言えないでありましょう。

戦後、台湾で生まれた3人の子供を連れて日本へ引き揚げた3年目、東京で出版された小説『七宝の手筐』は、やはり台湾の民間故事を題材としたもので、跋文に「目を閉じるとすぐ、台湾の光景が浮かびあがる。私はこの本によって、限りない慕情と讃美を宝島に捧げる」（大意）と書いております。

また7年目の昭和27年に出版された『ちょぷらん島漂流記』の後記にも、「この本を以て心から我が愛する台湾に捧げる」と書いております。

つい今年の古稀記念出版の長篇小説『台湾縦貫鉄道』まで、心の故郷——台湾が一刻も忘れられないようです。

2．もっとも多く文芸雑誌を発行したこと。（参考資料の1）

氏が台湾で編集及び発行した雑誌は8種もあります。

大正13年5月、16歳の若さで、ガリ版の文芸同人雑誌『桜草』を始め、大正15年5月より歌誌『泊芙藍』、同年8月より詩誌『扒龍船（ペイリョンツウン）』を創刊しましたが、本格的に文壇に登場したのは、やや後の事でした。

昭和8年、早稲田大学を卒業、帰台して『台湾日日新報』文芸欄を編集し、同時に「台湾愛書会」から発行された最高水準の書誌学雑誌『愛書』を主宰しました。

翌年、氏は台湾郷土文芸誌『媽祖』を創刊し、ちなんで「媽祖書房」を設け、その発行所としました。

昭和14年、「媽祖書房」を「日孝山房」に改め、台湾風土文芸誌『台湾風土記』を創刊し、同年、「台湾詩人協会」を作り、機関誌『華麗島』を創刊しました。

昭和15年改めて「台湾文芸家協会」を組織し、機関誌『文芸台湾』を創刊、史上最高の38号まで発行しました。

以上、一人で前後8種の文芸誌を編集し発行したことは、氏の右に出るものはいないと申し上げても過言ではありません。

3．もっとも多く文学著書を出版したこと。——

氏の早稲田大学時代の習作詩集を除けば、終戦まで出版された単行本は次の通りです。

①『媽祖祭』：昭和10年4月、台北媽祖書房刊行、限定330部、処女詩集。

②『楚楚公主』：昭和10年11月、台北媽祖書房刊行、限定30部、伝奇小説。

③『猫寺』：昭和11年12月、台北媽祖書房刊行、限定222部、童話。

④『亜片』：昭和12年7月、台北媽祖書房刊行、限定100部、詩集。

⑤『絵本桃太郎』：昭和13年5月、台北日孝山房刊行、限定75部、児童詩。

⑥『傘仙人』：昭和13年8月、台北日孝山房刊行、限定222部、童話。

⑦『嘉定屠城紀略』：昭和14年4月、台北日孝山房刊行、限定75部、小説翻訳。

⑧『カタコトの歌』：昭和14年9月、台北日孝山房刊行、限定222部、長男西川潤　三歳の童謡。

⑨『梨花夫人』：昭和15年7月、台北日孝山房刊行、限定75部、伝奇小説。

⑩『梨花夫人』：昭和15年7月、東京東都書籍株式会社発行。

⑪『華麗島頌歌』：昭和15年9月、台北日孝山房刊行、限定500部、詩集。

⑫『赤嵌記』：昭和15年12月、台北日孝山房刊行、限定75部、小説。

⑬『採蓮花歌』：昭和16年11月、台北日孝山房刊行、限定75部、詩集。

⑭『浪曼』：昭和16年12月、台北日孝山房刊行、限定75部、小説。

⑮『西遊記』：昭和17年12月から18年11月まで、全5巻、台北台湾芸術社

刊行、小説翻訳。

⑯『台湾文学集』：昭和17年8月、東京大阪屋号書店発行、共著、評論・創作集。

⑰『赤嵌記』：昭和17年12月、東京書物展望社刊行、小説。

⑱『花妖箋』：昭和18年1月、台北日孝山房刊行、限定75部、詩劇。

⑲『台湾絵本』：昭和18年1月、東亜旅行社台北支店刊行、共著、詩と随筆集。

⑳『一つの決意』：昭和18年6月、台北、文芸台湾社刊行、限定500部、詩集。

㉑『延平郡王の歌』：昭和18年9月、台北日孝山房刊行、限定100部、詩集。

㉒『桃園の客』：昭和18年10月、台北日孝山房刊行、限定75部、小説。

㉓『生死の海』：昭和19年3月、台湾出版文化株式会社発行、3,000部、小説。

㉔『日本の柱』：昭和19年12月、台湾出版文化株式会社発行、伝記小説。

以上24種の中、『梨花夫人』と『赤嵌記』はそれぞれ重ねて東京で再刊したので、実際には氏の著書は22種あります。なお、この22種の中、21種は台湾で出版され、しかも殆んど手作りの限定本でした。台湾出版史上に於いて、一人の作家がこれほどの単行本を出版したことは、空前と言ってもさしつかえがないでしょう。

4．積極的に「皇民化運動」に協力したこと。——

上述の編集・著作活動によって、氏が当時台湾文壇の大御所になったと言うことができるかも知れません。昭和13年、氏が詩集『亜片』を刊行したとき、佐藤春夫・堀口大学らの審査で、「文芸沦論詩業功労賞」が贈られたことによって、早くも中央文壇に認められたようであります。

昭和16年4月、台湾「皇民奉公会」が設立され、翌年9月、「日本文学奉公会」の台湾支部として、「台湾文芸家協会」が改組されました。同年12月、同協会から西川氏と浜田隼雄・龍瑛宗・張文環の4人が台湾代表として、第1回「大東亜文学者大会」に派遣されました。昭和17年2月、「皇民奉公会

文化賞」が設けられ、氏が小説『赤嵌記』によってその第1回文学賞を贈られました。

もともと氏は耽美的・浪曼的な本質と士族家風の傳統を持っている詩人ですから、その文学的性格と、当時の日本帝国主義の拡張政策の中に潜む幻想性と一致するものがあったのでありましょうか、ついに積極的に日本帝国の植民統治を強化する「皇民化運動」に協力したことは見逃せません。

その一例として、氏が「大東亜文学者大会」に参加して間もなく、氏の作品として初めて大東亜聖戦を讃美する詩集『一つの決意』と小説『生死の海』を著わしたのであります。

また、氏が「台湾決戦文学会議」の席上で強迫的な発言をしたことであります。当時、日中全面戦争に突入するや、台湾にも戦時体制が実施され、思想統制が強化された結果、台湾の新聞雑誌は台湾総督府の統制下に置かれました。残った文芸雑誌は西川満を中心とする『文芸台湾』と、台湾人作家張文環を中心とする『台湾文学』の2誌しかありませんでしたが、前者はますます体制側に傾き、後者は一貫して反体制的傾向を帯び、次第に両陣営の対立が激しくなりました。

そこで、昭和17年11月13日、総督府情報課の指導の下に、台北公会堂で「台湾文学奉公会」の主催した「台湾文学決戦会議」が開かれ、西川氏の提案によって、両誌は名目上合併する形で、実際には『台湾文学』が解消されて、『文芸台湾』は新たに「台湾文学奉公会」の機関誌として『台湾文芸』に変身してしまいました。

もちろんこのいきさつの背後には総督府の意図がありますが、西川氏が統治者の政策に追従しなければならなかった原因もいろいろあったと思います。しかし、この言動から台日双方の心ある者に大きな不満を与えたことは否定できません。

4．西川文学の意義

たしかに戦争末期に於ける西川氏の言動は、被統治者にとっては決して好ましくはありませんでしたが、当時の台湾文壇を見ますと、ごく少数の反骨作家を除いては、日本人台湾人を問わず、ほとんどの作家は余儀なく統治者の指示にしたがわなければなりませんでした。もっと広く見ますと、同時代の日本本土作家たちも同じ穴の貉（むじな）であったと言うことができましょう。奥野健男氏の『日本文学史』（中央公論社刊）にこう書いています。

「（日本本土作家たち）一部の文学者の中には醜く当局に便乗し、密告により仲間を売ったり、また狂信的な皇国主義的、ファッショ的言動をなす者もいましたが、ほとんどの文学者たちの姿勢は消極的でありました。（中略）生命を賭して軍国主義や戦争反対の主張を積極的に貫き通した文学者がいなかったという事実は、日本の文学者の弱さとも、日本という民族や社会の宿命的性格とも考えられますが、ぼくらに深刻な反省をうながさずにいません。」

このような観点からみますと、「皇民化運動」に協力したことは必ずしも西川氏一人だけの欠点ではありません。また一つの欠点を以てその作家の全面を否定することは公平だとは言えません。冷静に検討すれば、氏の台湾に於ける長い文学活動は、少くとも4つの意義を持っていると思います。

1．台湾人に〝台湾文学〟と言う意識を強く植えつけたこと。――

かつて台湾文壇には漢詩文があっても、それは明清文学の支流であり、日本文の作品があってもそれは日本文学の亜流である、とほとんどの作者は無意識にこう自認していたと言ってよろしいでしょう。しかし西川氏の雑誌や著書では常に〝台湾文学〟や〝華麗島文芸〟と言う言葉を堂々と使っており、さらに〝台湾文学〟のありかたを明確に主張することもしばしばありました。例えば、氏の論文「台湾文芸界の展望」（昭和14年『台湾時報』1月号所載）ではこう言っております：

「今日以後、いたづらに東京文学を範とするをやめよ。（中略）南は南、

北は北、明るく澄みわたる国にありながら、いつまでも暗い北国の雪空を思って何になる。日本はやがて南に伸びてゆくであらう。われら文芸の道に携はるもの、今にして深く自覚を持たざりしならば、後世、子孫に対して何の面目があらう。華麗島の文芸をして、南海にふさはしき、天そそり立つ巨峯たらしむること、これがわれらの天職である。」

こうした考え方によって、氏は明らかに台湾文学の独自性を主張し、台湾人を覚醒させたのであります。そしてこれによって、台湾人作家も氏の雑誌や協会に参与した人も少くありませんでした。

2．台湾の民間文芸を香り高い文学に昇華させたこと。——

氏の雑誌著書を見ても分りますように、その内容はほとんど台湾民間にころがっている卑俗な故事・伝説・風習などを取り上げて文芸化したものであります。今まで人々に無視された素材は、氏の浪曼的な情緒と芸術的技巧によって、一変して文学の殿堂に昇華されました。

例えば、台南の古い下町に狭い路地があります。一人通れるくらいの狭い路地で、婦人たちはよくすれちがいの男性に乳房をさわられますので、昔からこの路地を摸乳巷（もにゆうこう）、つまり乳房のさわれる路地と言われてきました。そのため西川氏はこれを題材として、「摸乳巷の歌」と言う詩を作りました。

「摸乳巷。細い路地を。珊々（さんさん）よ。壁づたいにゆけば。うすらあかり。空はけむる。

茫（ぼう）として。月の暈（かさ）。眼（まなこ）とじ。うっとりと。そのかみの一刻（ひとときを）。しのびてあれば。（中略）

石だたみ。冷え冷えと。珊々よ。菊の香（か）に汝（なれ）を求めて。手さぐりに。われはゆく。摸乳巷。」

なお、書物そのものも氏の独創的な装幀や丁寧な手作りによって、豪華な限定本となり珍貴な工芸品でありますので、その内容もいっそう幽雅な趣きが漂ってきます。

3．台湾人作家を養成したこと。——

氏は長い歳月に独自の文学の道を歩みながら、雑誌を発行するためいく度となく文学団体を結成し、したがいまして広く内外の文士と交遊し、大勢の作家たちを同人に加えました。日本人台湾人を問わず、戦前台湾在住の作家たちは、氏との関係のなかった人はまれだと言えましょう。

友人間の提携は別として、氏の台湾在住時代最後の台湾人弟子である葉石涛氏は、台南二中を卒業後、西川氏に師事し、『台湾文芸』の編集を手伝いながら、フランス文学を始め世界各国文学を教わりましたので、19歳の若さで文壇に登場しました。そして戦後から今日まで葉氏が一貫して台湾郷土文学を鼓吹し、台湾文壇の牛耳を執っていることは周知の通りであります。若し西川氏の指導と西川文学の影響がなければ、おそらく文学者としての葉石涛は存在しなかったでしょう。

4．日本〝外地文学〟の領域を開拓したこと。——

たとえいかに氏が台湾を愛し、独自の台湾文学の旗を掲げ、文学活動に励んできたとしても、その一貫した執念はいったいどこにあるのでしょうか。その答えは次の一文を見ることによって明らかに知ることができます。

「かく観じ来つて、つくづく思ふのは、開花期にある台湾の文芸は、今後あくまで台湾独自の発達をとげねばならないと云ふことである。断じて中央文芸の亜流や、従属的な作品であってはならない。かのフレデリック・ミストラルが、南仏の寒村にあって、巴里の都市文芸を凌ぐプロヴァンス語による珠玉の詩を生み、遂に宏大な宮殿にも比すべき輝かしきプロヴァンス文学を樹立、心あるひとをして永く讃仰の声を発せしめたやうに、わが南海の華麗島にも当然その名にふさはしい文芸を生み、日本文学史上特異の地位を占むべきである。」（前掲「台湾文芸界の展望」）

このように見ますと、氏の台湾文学の主張は、決して台湾人—被統治者のための台湾文学ではなく、あくまでも「日本文学史上特異の地位を占むべき」の台湾文学であります。言いかえれば、氏のすべての努力は、独特の台湾文学を樹立し、それを日本文学の一環としての〝外地文学〟の地歩を築くため

であります。結果から見ますと、氏はたしかにこの新しい領域の開拓に貢献したと言えると思います。

5．むすびに

日本は国際社会に入るべきである。とよく言われます。そのためにまづ日本文化の国際化を進めなければならないと思います。

最近、よく海外の日本人戦没者の遺骨を収集に出かける人が多いと聞きます。しかし同時に海外に散佚している戦前の日本人著作を収集することも大切ではないかと思います。いや、もっともっと必要だと思います。そして日本の外地文学の研究こそ、今後の国際社会に於ける日本文学史に残された大きな課題ではないでしょうか。

日本文化は常に受け入れる態勢ばかりではなく、過去においても現在に於いても海外に進出したことは事実であります。日本文化の一環としての日本文学も、新しい視点で国際化へ進むべきではないかと私は固く信じております。

参考資料

西川満編輯発行ノ雑誌（戦前之部）

1．『桜草』

大正 13 年 5 月創刊→大正 15 年 4 月終刊。計 14 号。

台北、桜草社発行。

2．『洎芙藍』

大正 15 年 5 月創刊、計 1 号。

台北、洎芙藍社発行。

3．『扒龍船』

大正 15 年 8 月創刊→大正 15 年 9 月終刊。計 2 号。

台北扒龍船詩社発行。

4．『愛社』

昭和8年6月創刊→昭和17年8月終刊。計15輯。

台湾愛書会発行。

編輯発行人：中曽根武多（第1輯）

西川満（第2輯～15輯）

第1輯：S．8．8．16　　第2輯：S．9．8．1

第3輯：S．9．12．28　　第4輯：S．10．9．1

第5輯：S．11．1．2　　第6輯：S．11．4．20

第7輯：S．11．9．1　　第8輯：S．12．1．2

第9輯：S．12．5．10　　第10輯：S．13．4．8

第11輯：S．13．12．15　　第12輯：S．15．1．1

第13輯：S．15．9．1　　第14輯：S．16．5．10

第15輯：S．17．8．25

5．『媽祖』

昭和9年10月10日創刊→昭和13年3月3日終刊。計16号。

台北、媽祖書房発行。

第1巻1冊（S．9．10．10）　　第1巻2冊（S．9．12．10）

第1巻3冊（S．10．2．10）　　第1巻4冊（S．10．5．10）

第1巻5冊（S．10．7．10）　　第1巻6冊（S．10．9．10）

第2巻1冊（S．10．11．15）　　第2巻2冊（S．11．1．15）

第2巻3冊（S．11．4．10）　　第2巻4冊（S．11．6．15）

第2巻5冊（S．11．9．15）　　第2巻6冊（S．12．1．10）

第3巻1冊（S．12．3．10）　　第3巻2冊（S．12．6．15）

第3巻3冊（S．12．12．22）　　第3巻4冊（S．13．3．3）

6．『台湾風土記』

昭和14年2月12日創刊→昭和15年4月8日終刊。計4号。

台北、日孝山房発行。

巻之1（S．14．2．12）　巻之2（S．14．5．12）

巻之3（S．14．10．22）　巻之4（S．15．4．8）

7．『華麗島』

昭和14年12月1日創刊、計1号。

台湾詩人協会発行。

創刊号（S．14．12．1）

8．『文芸台湾』

昭和15年1月1日創刊→昭和19年1月1日終刊。計38号。

台湾文芸家協会発行。

第1巻1号（S．15．1．1）　第1巻2号（S．15．3．1）

第1巻3号（S．15．5．1）　第1巻4号（S．15．7．10）

第1巻5号（S．15．10．1）　第1巻6号（S．15．12．10）

第2巻1号（S．16．3．1）　第2巻2号（S．16．5．20）

第2巻3号（S．16．6．20）　第2巻4号（S．16．7．20）

第2巻5号（S．16．8．20）　第2巻6号（S．16．9．20）

第3巻1号（S．16．10．20）　第3巻2号（S．16．11．20）

第3巻3号（S．16．12．20）　第3巻4号（S．17．1．20）

第3巻5号（S．17．2．20）　第3巻6号（S．17．3．20）

第4巻1号（S．17．4．20）　第4巻2号（S．17．5．20）

第4巻3号（S．17．6．20）　第4巻4号（S．17．7．20）

第4巻5号（S．17．8．20）　第4巻6号（S．17．9．20）

第5巻1号（S．17．10．20）　第5巻2号（S．17．11．20）

第5巻3号（S．17．12．25）　第5巻4号（S．18．2．1）

第5巻5号（S．18．3．1）　第5巻6号（S．18．4．1）

第6巻1号（S．18．5．1）　第6巻2号（S．18．6．1）

第6巻3号（S．18．7．1）　第6巻4号（S．18．8．1）

第6巻5号（S．18．9．1）　第6巻6号（S．18．11．1）
第7巻1号（S．18．12．1）　第7巻2号（S．19．1．1）

参考資料：

西川満著作録（戦前の部）

張良澤　編

1．『媽祖祭』

1935年4月8日、台北、媽祖書房発行

2．『楚楚公主』

1935年11月10日、台北、媽祖書房発行

3．『猫寺』

1936年12月22日、台北、媽祖書房発行（カバー）

4．『亜片』

1937年7月20日、台北、媽祖書房発行

5．『絵本桃太郎』

1938年5月5日、日孝山房発行（帙）

6．『傘仙人』

1938年8月8日、台北、日孝山房発行（カバー）

7．『嘉定屠城紀略』

1939年4月28日、台北、日孝山房発行（帙）

8．『カタコトの歌』

1939年9月22日、台北、日孝山房発行（帙）

9．『梨花夫人』

1940年7月20日、台北、日孝山房発行

10．1940年7月22日、東京東都書籍株式会社発行（帙）

11．『華麗島頌歌』

1940年9月、台北、日孝山房発行

12.『赤嵌記』

1940年12月22日、台北、日孝山房発行（帙）

13.『採蓮花歌』

1941年11月20日、台北、日孝山房発行（カバー）

14.『浪曼』

1941年12月1日、台北、日孝山房発行）カバー）

15.『西遊記』5巻

1942年2月11日（上巻）、1942年5月20日（元巻）、1942年8月30日（燈巻）、1943年9月8日（大巻）、1943年11月10日（百花の巻）台北、台湾芸術社発行

16.『台湾文学集』（共著）

1942年8月10日、大阪屋号書店発行

17.『赤嵌記』

1942年12月15日、東京、書物展望社発行（帙）

18.『花妖箋』

1943年1月15日、台北、日孝山房発行

19.『台湾絵本』（共著）

1943年1月28日、東亜旅行社台北支社発行

20.『一つの決意』

1943年6月10日、台北、文芸台湾社発行

（普及本）（精装本）

21.『延平郡王の歌』

1943年9月18日、台北、日孝山房発行（帙）

22.『桃園の客』

1943年10月、台北、日孝山房発行（帙）

23.『生死の海』

1944年3月27日、台北、台湾出版文化株式会社発行

24.『日本の柱』

1944年12月20日、台北、台湾出版文化株式会社発行

討議要旨

臼田甚五郎氏から、論中、西川は台湾の民間文芸を香り高いものにしたと指摘しているが、具体的にどういうことか、という質問があり、発表者より、例えば『台湾風土記』などは西川が主催した雑誌だが、ここには台湾の民間文芸のほとんどが収集されており、また文芸化されてもいるとの返答があった。

鄭清茂氏より、西川が当時養成した台湾作家の戦後の運命を教示されたいとの問いかけに対し、発表者より、現在活躍している葉石涛という作家は若くして西川に色々教わった人ですが、この人を除いて、当時西川と同年代であった台湾人作家はすべて絶筆状態に陥ったとの回答があった。